「山崎合戦の頃の高山右近」というのが、今回のテーマです。

さて、皆さんに、タイムマシーンに乗っていただいて、430年前の「安土桃山時代」の日本に、ご案内することにいたしましょう。

天正10年（西暦1582年）、6月2日の朝、6時頃のことです。

京の都の、四条坊門通りにあった教会、高山飛弾守・右近の父子（おやこ）も、その建設に多大な協力をいたしました。町の人たちに、「南蛮寺」とか「南蛮堂」と呼ばれていた教会で、フランシスコ・カリオン神父が朝の祈りの準備をしておりましたが、そのカリオン神父の耳に、ただごとではない、戦いの声が聞こえてきました。

ワー、ワー、ワー

西の方向、教会から150mほどしか離れていない本能寺のあたりから聞こえてきます。

ワー、ワー、ワー

一体、何事がおこっているのでしょうか。

いそいで外に出てみますと、火の手が上がっているのも、はっきりと見えます。まさしく、本能寺の辺りにまちがいありません。

これが、いわゆる「本能寺の変」といわれるもので、フランシスコ・カリオン神父は、「本能寺の変」の貴重な証人の一人となられたのです。

そのころ、羽柴秀吉は、岡山県の、備中・高松城を水攻めにしていました。四国・香川県の高松ではありません。岡山県の、備中（びっちゅう）・高松城です。

高松城主・清水宗治（むねはる）の要請を受けて、毛利輝元が大軍を率いてやって来るということを知って、秀吉は、織田信長のもとに「至急に援軍を送って下さるように」と、求めてきたのです。

信長は、いずれ自らも出向いていくつもりでしたが、まず、明智光秀を総大将として、中国地方に赴くように命じました。

高山右近も、明智光秀の指揮下にあって、備中・高松に向かって、すでに出発していましたので、ここ高槻城の城内に残っていたのは、ジュスタ夫人と、わずかの守備兵だけだったのです。

明智光秀がもし、地理的に見ても重要だった高槻城や、おとなりの茨木城などに、500人ほどの兵士をおくって城を押さえさせ、人質をとる ということをしていたら、高山右近の、その後の動きに大きな影響があったのですが、光秀は、そのようにはしませんでした。

光秀は右近が、必ず、自分の味方になるものと考えていましたので、使者を、ジュスタ夫人のもとにつかわした時も、次のように伝えているのです。

「高槻城は、自分の味方であるから、少しも心配する必要はない。」 そのように伝えさせているのです。

人質として、子どもを求めたり、パーデレ達・神父達を捕らえたりするようなことはしませんでした。

この時、高槻の地をはなれて、淀川の向こう側、大東市の三箇（さんが）教会の方に出かけていた、フォルナレッティ神父は、次のように言いました。

「このようになったことは、まったく、主の摂理であった。」 主がそのようにしてくださったのだ！

そのように語ったほどでした。

安土にあったセミナリオ・神学校から生徒たちといっしょにのがれてきた、オルガンチーノ神父に対しては、

「光秀に従うよう、高山右近へ手紙を出すように。」 そのように要請がありました。

オルガンチーノ神父は、日本語の手紙とポルトガル語の手紙を準備しました。

日本語の手紙には、光秀の言う通りの内容のものを書きしるしました。しかし、ポルトガル語の手紙には、

「たとえ、我ら・パーデレたちがみな、十字架にかけられるようなことになっても、主・デウスの正義のために、この謀叛人に味方しないように。そのようにすることが、主の御（おん）ためである。」 そのように書き送ったのでした。

このことからしても、右近が、ポルトガル語を理解できたことが、わかると思います。

高山右近は、オルガンチーノ神父の手紙を待つまでもなく、すでに態度を決めていました。

右近は、急いで兵をとって返し、高槻にもどって来ました。

必ず人質が取られているだろうと思っていましたのに、そのようなこともなく、右近は大いに喜び、主なる神・デウスに感謝したのでした。

右近は、城中の備えを固めました。そして、秀吉が、信長の死を知ったあと、急ぎ毛利方との和平をとりつけ、「中国大返し」で、全軍を率いて、姫路・西宮、そして、6月11日に尼崎に到着した、その秀吉のもとに、右近は、8歳の長男・十次郎を連れて、かけつけたのでした。山崎合戦の2日前のことです。

息子の十次郎は人質のつもりでしたが、秀吉は受けとりませんでした。

「無道者（むどうもの）の光秀と御同心はあるまじく候。」

“道にはずれたことをしでかした光秀と、同じ心であるはずがない。” そのように言って、人質のことは問題にもしませんでした。

明るく6月12日、山崎合戦の前日、軍会議がもたれました。

西国街道が淀川と天王山との間を抜けて、せまくなっている、「山崎」を中心にして、軍を配置することになりました。だれが先陣になるのか。一番前に出て戦うのは誰か、誰が先陣をつとめるのかということになって、右近は、次のように主張しています。

「敵に近い城主を先陣とすることは、弓矢の作法である。それがしの居城・高槻城は、光秀の陣する勝龍寺城に最も近い。従って、先陣は、自分をおいて、他にはないはずである。」

茨木城主だった、中川瀬兵衛清秀も、先陣を主張し、言い争いになりましたが、右近の主張が採用されます。

そして、その時、歴史は動いた！ いよいよ天下分け目の日。天正10年6月13日。今の暦でいいますと、7月の2日になります。天気は、きのうから降り続けている、梅雨の雨です。

その前夜、光秀軍は、それまで本陣を、下鳥羽に置いて、京の都を守り、支配する態勢をとっていましたが、その下鳥羽を立ち、強い雨の中、桂川を渡って、勝龍寺城を前線の拠点とします。

そして、それより南方・約1kmほどの所にある「御坊塚」を本陣にします。

「太閤記」に、次のような記述があります。

「惟任（これとう・光秀のことですが）は、“おんぼうが塚”に、五千有余の勢（ぜい）を備えて有りしが・・・」

そのように記されている場所です。「御坊塚」（ごぼうづか）・「おんぼうが塚」

サントリービール工場「サントリー桂ブルワリー」の場所は、JRや阪急電車からも見えますから、大体の場所はおわかりになるでしょうか。その、サントリービール工場の正門から見ますと、前方、左よりに、小高い竹藪が見えます。その場所が、「御坊塚」「おんぼうが塚」です。

工場のまわりの道を、ぐるっと回って西側に行きますと、「明智光秀本陣跡」と記された説明板が建てられています。

もう一つの場所、「勝龍寺城」の方は、現在、「勝龍寺城公園」として整備されていますが、光秀が戦いの拠点とした勝龍寺城は、この時はすでに丹後の宮津城の方に移っておりましたが、光秀の娘の玉、のちの細川ガラシアが、4年前、織田信長の執り成しによって、細川与一郎・のちの細川忠興のもとに輿入れ（こしいれ）してきた所でもあったのです。

さて、両軍は、円明寺川（えんみょうじがわ）、現在は小泉川と呼ばれていますが、円明寺川をはさんで対峙しています。向き合っています。

このあたり一帯は、「深田」といって、一年中、なかなか水が引いてくれない田んぼでした。

その田んぼには、植えられた稲の苗がしっかり育ってきていて、青々としていますが、この合戦のために、すべては踏み荒らされるでしょうし、この年の収穫は絶望的です。

村人たちは、遠く、山中などにかくれて難をさけていますが、戦争があると、苦しみに会い、犠牲を強いられるのは、いつも、百姓など、一般庶民なのです。

目と鼻の先には、この日の戦いの結果を見定めるかのようにして、標高270mの天王山が横たわっています。

ここ一両日、光秀は戦略上、天王山を如何に扱うべきか、迷いに迷いましたが、結局、天王山を戦場外に置きました。

合戦の主戦場となったのは、天王山のふもとの東側一帯の平地でしたから、“天下分け目の天王山”といった言い方は、正しくはないということになります。

さて、明智光秀軍は、総勢1万6千人。中央前衛には、猛将の誉れ高い、重臣・斉藤利三（としみつ）の隊3000名他、右翼・左翼・山の手一帯を、しっかり固めています。

一方、羽柴秀吉軍の総勢は、明智軍の倍の3万1千人以上。

中央の斉藤利三隊と相（あい）対するのは、秀吉軍の先鋒・高山右近の隊2千他、中川清秀や堀久太郎の隊。

左翼・山の手一帯は、前の晩、明智側と天王山の争奪戦をして勝利しました堀尾茂助（もすけ）の隊や、黒田官兵衛孝高（よしたか）の隊。

右翼・川の手、淀川寄り一帯は、池田恒興などの隊が、万全の備えをして、開戦の時を待っています。

各隊の陣備えは出来ていますが、肝心の羽柴秀吉は、まだ摂津富田にいて、山崎には来ていません。

なぜかといいますと、この戦いが、「織田信長の甲い合戦」であるという大義名分を得るために、総大将は自分ではない・羽柴秀吉ではない、信長の三男の織田信孝を総大将とするために、その信孝が大坂からやって来るのを待っていたのです。

右近は、秀吉軍の先鋒・先陣として、山崎村の要所要所に、すき間なく兵を配置し、街道筋から山崎村に入る木戸を固く閉じさせています。明智軍の侵入は勿論のこと、後ろから来る味方の抜け駆けをも決して許さない構えです。

当時、山崎村は、西国街道に接した街道集落でしたが、東西の両端に「黒門」がありまして、村の治安を守っていました。黒門の“西門”と“東門”です。

特に、明智軍に近い“東門”のあたりは、緊迫しています。

右近は、明智軍が近づいてきているとの連絡を受けて、急使を、まだ富田にいる秀吉のもとに遣わします。

「なるべく急いで来てくださいますように。」 このように緊急の要請はしましたが、一方では、敵に向かって打って出ようと、はやる心の兵士たちを抑えていたのですが

明智の軍が、村の門・東門を叩くほど近づいてくるに及んで、右近は、これ以上、待つことは出来ないと判断して、一千足らずの手勢（てぜい）を率いて、黒門を開き、攻撃をしかけます。

右近みずから、先陣としての責任を全うするために、「一番合戦」にのぞんだのです。

大方がキリシタンだった彼らは、勇敢に戦いました。そして、味方で死んだ者は一人だけでしたが、明智方200人を討ち取ったのです。圧倒的な勝利でした。

加えて、両横から、中川隊・池田隊も加勢しましたので、総大将・織田信孝や秀吉の主力、1万7千人が到着する前に、明智軍はかなり浮き足立ち、勝龍寺城に逃げ込む兵もあって、その後の合戦の結果に、大きな影響を与えたのです。

これは、山崎合戦開始の4時間前、6月13日の正午ごろのことでした。

このことを、後から伝え聞いた総大将の織田信孝は、次のように言いました。

「右近が、キリシタンであるがゆえに、このような好結果を得たのである。」 そのように言ったほどでした。

さて、高山右近の隊が「一番合戦」をたたかい、圧倒的な勝利をおさめていた、同じ時刻の正午頃、大坂より、待ちに待った織田信孝と、補佐役の丹羽長秀が、7千の兵を率いて、富田に到着します。

そして、秀吉本隊1万と共に、山崎に向かい、午後3時頃に、現地に到着したのです。合戦1時間前です。

両軍が向き合う中、一触即発、いつ戦いが始まってもし思議ではない状況となりました。

申の刻（さるのこく）になりました。午後4時頃です。

山の手の方で鉄砲を撃ち合う音が聞こえてきました。明智軍が戦さをしかけてきたのです。そして、それをきっかけにして、「山崎合戦」が始まったのです。

中央では、戦(いくさ)上手の勇将・斉藤利三隊が、正面の高山隊めがけて突入してきました。血が流され、いのちをうばい合う、激しい戦いとなりました。

多数の死傷者を出しながら、一進一退の戦いは、「信長の甲い合戦」として、数の上でも、勢いの上でもまさっていた秀吉軍が、第一線の各隊に、新手(あらて)の兵を繰り出しながら、光秀軍を圧倒していきました。

光秀軍の各隊を率いる主だった武将が、次々に、討ち死にしていきました。敗色が濃くなり、逃亡する兵の姿が多く見かけられるようになってきて、明智軍は、総崩れしていきました。

光秀も、老臣・比田帯刀(ひだたてわき)の進言を受けて、勝龍寺城へ敗走しましたが、ここも取り囲まれ、夜の内に城を脱出し、近江の坂本城へ向かう途中、京都市伏見区小栗栖(おくるす)の、竹藪の道で、落武者狩りの、土民の群の、竹槍に突きさされ、わずか12日の天下、そして、55歳の生涯を閉じていったのです。

坂本城にいる妻に届けてくれるようにと、託した辞世の一節、

「五十五年の夢、覚め来たらば、一元に帰す。」

“55年の生涯に、自分が求めてきた夢も、醒めてみると、同じところに帰結するというほどの、はかないものである。”

五十五年の夢、覚め来たらば、一元に帰す。

この合戦に勝利した羽柴秀吉も、16年後の辞世の歌は、皆さんもよくご存じの歌ではないでしょうか。

「つゆと落ち つゆと消えにし わが身かな なにわの事も ゆめの又ゆめ」

生涯かけて追い求めてきたものが、夢のまた夢、はかない、実体のないものであったと、光秀も秀吉も証言して、地上の生涯を終えていったのです。

聖書で言いますと、同じことを、あの栄華をきわめたソロモン王が、晩年になって、旧約聖書の「伝道者の書」の中で、次のように言っていますよ。

空の空。(くうのくう)空の空。すべては空。

日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

古今東西、彼以上の豪勢な生活をした人はいない、又、彼以上の知恵ある者もないといわれているソロモン王の言葉なのです。

ソロモン王は、晩年、伝道者となって、次のような言葉で語っています。

「空の空。伝道者は言う。すべては空。

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。

神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとって、すべてである。」

さて、ここにお集まりの(これを読んでくださっている)皆さんは、自らの一生をどのような言葉で終わっていかうとされているのでしょうか。

明智光秀の辞世 「五十五年の夢 覚め来たらば 一元に帰す」

豊臣秀吉の辞世 「つゆと落ち つゆと消えにし わが身かな なにわの事も ゆめの又ゆめ」

栄華をきわめたソロモン王のことは 「空の空。空の空。すべては空。」

生涯かけて追い求めてきたもの、あのことも、このことも、そしてあのことも、そして又、あのことも、夢のまた夢、はかない、実体のないものであった、と光秀も秀吉も証言して、地上の生涯を終えていったのでした。

死傷者、光秀軍三千。秀吉軍三千三百。

午後4時に始まった合戦は、わずか一刻半。約3時間ほどで、その勝敗は決まったのでした。

陰暦6月13日。今の暦では7月2日になりますので、7月2日午後7時、いつしか顔を見せましたが、なかなか暮れなかった夏の太陽も、既に西山のむこうに沈み、くもり空の勝龍寺城は、夕闇に包まれていき、明智軍の残党を一掃するための、夜の戦いには行っていったのでした。

2週間後の、6月27日、愛知県・尾張の清洲城で、今後の処置について、話し合いがもたれました。

高山右近はこの時、能勢3千石と、江州（ごうしゅう）1千石、合計4千石の増俸が与えられています。

というわけで、山崎合戦の後に、能勢の地が、高山右近の領地に組み入れられていきました。

能勢の地に、“かくれキリシタン”のものかもしれないと思われるものが残されてきていますが、このことは、かつて高山右近の領地だったということと、大いに関係があることだと思われま

秀吉は、京の都、及びその周辺の地域一帯を管轄するにあたり、光秀を撃破した山崎の地を、自らの拠点として、天王山の山頂に「山崎城」を築きます。

現在も、天王山に登りますと、山頂には、石垣・食い違い虎口（こぐち）などの遺構が残っていますし、文献からは、「天守閣」があったことも確認されています。

また、ふもとの宝寺、正式には「宝積寺」（ほうしゃくじ）といいますが、宝寺には、居住のための施設などが設けられていきました。

以後、秀吉は、天正12年に大坂城に移るまで、山崎城に入り、山崎の地を、事実上、「城下町」として整備していったのでした。

山崎の合戦

天王山の ふもとの村の
水田（みずた）鏡を 風わたりゆく
梅雨空低く 勝龍寺城
兵士向き合う 円明寺川

十字の旗を 高くなびかせ
先鋒右近の 二千の手兵（しゅへい）
激しい戦さ 正義のために
圧倒的な 勝利信じて

弓矢 鉄砲 斬り合うやいば
殺し殺され いのち消えゆき

小栗栖村の　　くらき闇より
おそう竹槍　　いのちつらぬく

六千こえる　　しかばね残り
踏み荒らされて　稲田あとなし
権力めざす　　もののふ達の
戦さ終わりにて　民は生きゆく

JR山崎駅のすぐ前に、「妙喜庵」があります。そこにある茶室は、国宝で、「待庵」（たいあん・待つ庵）と言われています。千利休がかかわった茶室で、唯一、今の世に残っているものです。

丸木造りで、黒を主調とした荒壁仕上げ。二畳敷という、極限の広さの茶室空間です。利休が追求した、侘茶（わびちゃ）の精神が見事に表現されています。

山崎には「利休屋敷」もありましたし、新たに秀吉の茶頭（さどう）・お茶頭（がしら）となった千宗易（後の千利休のことですが）に、秀吉は、山崎に茶室を造ることを求めたのでした。

利休が「待庵」を建てる時、丸木を準備した高山右近に対する利休直筆の礼状が残されています。

「丸木六本、仰せ付けられ候内、一本、用に立ち申し候。大慶（たいけい）此の事に候。相残るも、別に、用に立ち申すべく候。」

利休の「わび茶」の心をよく理解し、右近が丸木を準備したわけですが、利休の思いにピッタリのものが一本あったようで、大慶此の事に候。「大喜びする」というのは、このような事をいうのだろう、とまで言って感謝しています。

この丸木は、利休の感謝の手紙の内容からしても、待庵の大事な部分に使われていることでしょう。あるいは、“室床”（むろどこ）といわれる床の間の、床柱かもしれません。

右近は、利休が茶の湯を直伝した、直接に伝授した七人の弟子「利休七哲」の一人でしたし、「利休極上一の弟子也」 そのように、言われていたほどでした。

以上、「山崎合戦の頃の高山右近」のこと、又、島本や山崎辺りの様子について、見てまいりました。

最後まで、熱心にお聞き（お読み）くださって、ありがとうございました。